



## プラス $\alpha$ の指導

### どんなことにも 頑張れなかった生徒に注意

夏休み中、部活動にも勉強にも頑張れなかった生徒には特に注意したい。部活動に集中した生徒はその努力が部活動引退後の集中力など、「伸び」につながっていくケースが多い。しかし、熱心に取り組むことがなかった生徒は、夏休みを機に「諦めモード」に転じてしまうことがある。定期テストや模試で大きく成績が下降する生徒は要注意だ。夏休みの様子を把握しつつ、小テストなどのスモールステップで目標を設定し、「頑張る経験」を味わわせておくことが重要だ。

### 1週間をめどに 生活をリセットさせる

長期休暇、そして学園祭（文化祭）や修学旅行などの行事で、生徒は生活のリズムを乱しがちだ。生活・学習習慣を元に戻すためには、普段の生活に戻ってからの1週間が勝負。夏休み明け1週間、また修学旅行明け1週間で、スムーズに元の生活リズムに戻るためには、HRなどで「定期テストに向けて気持ちを切り替えよう」「〇週間後には模試があるぞ」といった声かけが重要になる。特に、遅刻や提出物の遅れなど、基本的な約束事が守れない場合は、毅然とした態度で指導していく。

### 行事を通してクラス集団の力を 体感させる

学園祭（文化祭）、体育祭、修学旅行など、2年生の9月から11月は多くの行事が行われる。2年生はその各行事で中心的な役割を果たすことになる。担任としてはそれらに全力投球させることで、「クラスで団結することの素晴らしさ」を体験させることを強く意識したい。目標に向かってクラスで努力し励まし合うことが、予想を超える成果につながるのだという成功体験を積むことで、3年生になったとき「受験は団体戦」という担任の言葉をより実感をもって受けとめられるようになる。

### 活用後のフォロー

◎図1、図2はいずれも代表例、ひな型である。だからこそ、これらを指導に活用した際の具体的な生徒の反応を次の学年に引き継ぎたい。例えば、「夏休みに思う通りに学習できず、自信を喪失していた生徒に模試の成績を使って声かけをしたら、生徒の行動はこう変わっていった」など具体的な事例を校内に蓄積していく。生徒の意識はその学校の文化でもあるから、基本形を踏まえた上で、3年間の指導ストーリーを学校独自に築くことが大切だ。図1も自校の生徒ではどんな曲線になるのか捉え直し、修正をしていくことが出来れば有意義だ。学校の財産をつくっていくことで、教師の指導力も継承されていく。

### データ活用 のねらい

## 生徒個々の心の動きを注視する

生徒の意欲変化をマクロで捉える●2年生の2学期は、しばしば「中だるみ」という言葉で表現される。では、具体的に「中だるみ」とは、どんな状況を指しているのだろうか。確かに「漫然として何もしない」という生徒もいるが、この時期は、行事や部活で忙しく、「多忙で学習に意識が回らない」という生徒も多い。また、教師自身も忙しく日々の活動に追われている。そこで生徒の意欲曲線を示した図1で、教師間で今後の生徒の学習意欲の変動を確認し、先を見通した指導の目線合わせを行いたい。

生徒の状況別の声かけ例を共有する●図2は夏休み前に実施した模試の結果に応じた、面談での声かけ例である。夏休み気分をリセットし、行事や部活動で忙しい中でも学習に意識を向けさせるツールとして活用する。教師間で各生徒のパターンに応じた声かけを共有する意味も大きい。

### データ活用 の流れ

## まず全体像の把握と学年方針の共有を

現実を把握し、方針を決定●図1を使って、生徒の意欲の基本的な動きを学年会などで共有する。多忙から、学習意欲が高まりにくいこの時期、従来の行事をどう利用できるか、学校としてどんな刺激を与えることが出来るかなどを検討する材料としたい。

学年の方針を踏まえて面談を実施●図1で集団指導の目線合わせをした後、図2を使って個別指導に落とし込む。多くの学校で生徒の意識づけに有効に活用できるのは模試や校内テストだ。特に成績票の返却などのタイミングは大切にしたい。受験生の指導経験が豊富な教師が中心となり「夏休みに計画通り学習できず、模試の結果も振るわなかった生徒」など、生徒のパターンを模試結果と状況の2つの軸でとらえ、具体的な声かけの内容を共有する。各担任は、それを個々の面談に生かしていく。

### 全体的な 意欲の経過を 踏まえた上で 個の指導に向かう

学年会で9月以降の生徒の意欲の変化を共有する  
(図1)

自校の9月以降の行事を再確認し、生徒へどのような刺激を与えるべきか検討する

自校の生徒像をより鮮明にした上で、声かけが必要なケースを整理する(図2)

夏休み明けから秋にかけての面談で、各担任が生徒に声かけを行う



## プラス $\alpha$ の指導

### 中下位層を励まし、 上位層には大志を植えつける

中下位層の生徒の多くは、自分の進路に対して臆病になっている。まずは、受験を前向きに捉えさせるような声かけや工夫が重要だ。「2年生のこの時期なら巻き返しは十分に可能」と、過去の先輩の事例などを交えて説明することも有効だ。また、上位層に対しては、大志を抱き更に上を目指すように働き掛ける。「この分野の勉強がしたいのなら、せっかくだから一番教育が充実しているところで勉強してみないか」など、難関大を目指す意味を伝え、発破をかける。

### 学問への興味を 進路選択の根本に

有名かどうかといった理由で志望校を選んでいると、受験生になった時、最後まで頑張り続けることが難しい。万一志望校を変えた時も、「有名でない大学」に進学する自分を受け入れにくい。小誌「未来をつくる大学の研究室」など、大学の学びの最前線を取り上げた記事を紹介し、「そこで何を学べるか」が進路選択では重要であることを伝え続けたい。将来、志望変更を余儀なくされる時も、「ここなら同じような研究が出来る」と前向きに変更できる素地をつくっておきたい。

### 文系・理系で 指導の方法を変える

生徒に進路について考えさせるとき、文系と理系で切り口が異なることを伝えておく。まず、理系では学部の種類はそれほど多くないが、学科・専攻が多岐にわたる。学べる内容や入試の中身も、学科・専攻ごとに細かく調べる必要がある。一方、文系は学部レベルから種類が豊富だ。名前だけではどんな内容が学べるのか、想像できないものもある。大学案内などでしっかりと学部研究をする必要がある。似たような名前の学部でも大学が異なれば中身も違うことを伝えておきたい。

### 活用後のフォロー

◎進路調査票は2年生の間は統一したフォーマットにし、保管しておけば、受験生になるまでの自身の成長（志望の高まり）を振り返る材料にもなる。また、2年生で記入した進路調査票は、3学年に引き継ぐことで、受験前の担任の指導にも活用できるはずだ。なお、進路調査票は、コピーして原本を保管した上で、生徒の記名部分を切り取って一冊にまとめ、クラス内で閲覧することを事前に伝えておくとうまい。同じクラスの仲間が調べた進路情報は、生徒にとって興味深いものとなり、進路選択の視野を広げる材料になる。更に、入試情報の変更に気をつければ、次年度の2年生が活用できる資料にもなる。

データ活用  
のねらい

## いったん視野を広げ、絞り込む

**気軽に大学を考えさせる** ●この時期の生徒は、大学・学部・学科に関する知識が乏しい。志望が固まっていない段階で「ここに行きたい!」という志望校を書きなさい」と迫ると、近隣の大学で安全圏内にあるところを安易に記入したりするケースもある。まず図3を使って「志望が固まっていない人は、どこでもいいから気になる大学のことを書いておいで」と気軽に進路を考えさせることが必要だ。実際、生徒の中には「記入したらずっと第1志望にしなくてはいけないのか」と聞いてくる者もいる。2年生のこの時期、まず大学に関心を持ち、可能性を広げて考えることが重要であると理解させたい。

**センター試験の仕組みを知る** ●一方で、大学入試に対する理解、特に2012年度より科目変更があるセンター試験への理解は確実に高めたい。目の前に迫った科目選択を、生徒に進路を考えさせる機会と捉えたい。

データ活用  
の流れ

## 志望の成熟度で指導を変える

**気になったポイントを確認する** ●「シミュレーション進路調査票」(図3)を配布し、記入を促す。面談では、「何が気になってその大学を選んだのか」を聞き、志望の度合いを確認する。また、生徒に「更にこんな大学を調べてみるといいよ」と視野を広げさせるための情報を提供し、進路について考える土台をつくる。

**面談で生徒の志望を成熟させる** ●進路調査票で記入した大学への志望度合いが高い生徒には、図4の科目選択サポートシートを渡してすぐに入試科目・配点を調べさせる。一方で、まだ大学に関する意識が低い生徒には、面談で生徒自身の適性や将来の希望を確認し、図3を叩き台にして教師が補助しながら生徒に徹底的に考えさせ、記入させる。配布前後のタイミングで、入試科目の見方や私立大の方式別入試の考え方など入試の基礎について HR などで説明するとよい。

### 幅広い視野と 入試の現実を 知る目を養う

シミュレーション進路調査票(図3)で、気になる大学について調べさせる

志望の度合いの高い生徒には、入試科目(特にセンター試験)について調べさせる(図4)

面談を通して、進路調査票でその大学を記入した理由を確認し、それが進路のこだわりになるか見極める

図4の科目選択サポートシートを利用し、さらに考えさせて記入させる